

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20320066

研究課題名（和文）南琉球方言の文法の基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental Studies of the Grammar of Southern Ryukyuan dialects

研究代表者

狩俣 繁久 (KARIMATA SHIGEHISA)

琉球大学 法文学部 教授

研究者番号：50224712

研究成果の概要（和文）：

石垣島石垣方言、宮良方言、西表祖納方言、多良間島方言、宮古島平良方言の格の記述と、とりたて助詞の中で最も注目され、係り結びの機能を持つと言われてきた *du* を記述した。同時に石垣方言、平良方言、今帰仁方言、首里方言の係助辞の比較研究を行ない、*du* に焦点化の機能は存するが、係り結びの機能を持たないことを指摘した。八重山方言の中でも特に研究の遅れていた西表方言の文法記述を行い、全体の概要を把握した。石垣方言の自動詞と他動詞の派生関係のタイプを記述し、ヴォイスと深い関係があることを記述した。

研究成果の概要（英文）：

We have described the case-marking system as well as the *du* particle, which has been said to function as one of the *kakari* particles, of Ishigaki dialect of Ishigaki, Miyara dialect, Sonai dialect of Iriomote, Tarama dialect and Hirara dialect of Miyako. Looking into its functions in the dialects of Ishigaki, Hirara, Nakijin and Shuri, we have also pointed out that the *du* particle functions as focus, but it does not as a *kakari* particle. By describing the grammar of Iriomote dialects, which have been understudied with compared to other dialects in Yaeyama, we have grasped a general contour of Yaeyama dialects. We also categorized intransitive and transitive verbs of Ishigaki dialect based on their derivational types and concluded that they have a close relationship with voice.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2009年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
総計	7,600,000	2,280,000	9,880,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：琉球方言、八重山方言、記述文法、格＝とりたて、係り結び、動詞形態論

1. 研究開始当初の背景

琉球方言は、ユネスコが2009年2月に挙げた、消滅の危機に瀕する世界の諸言語のうち特に重要な2400の言語に含まれている。ユネスコは琉球方言を言語差の大きさから

奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語に分割しているが、その中でも八重山方言（八重山語）は危機度の深刻な言語と認定されている。危機言語の継承と再活性化の方法として(1)辞書、(2)文法書、(3)

テキストの3点セットを整備することの必要性を、アメリカ人類学の基礎を築いた Franz・Boas が唱道している。琉球方言の継承と普及の観点からも(2)文法書の刊行が研究者に期待されている。しかし、継承と普及に必要な包括的で体系的な文法の記述研究は大きく遅れている。

これまでの宮古方言、八重山方言の文法に関する先行研究は、主要な形態素を抽出し、簡単な文法的な意味を記述する形式主義的な研究が多く、文法体系の体系的で包括的な記述研究という点からみても、方言の継承・普及という点からみても全く不十分なものであった。

そこで、本研究では、消滅の危機に瀕する琉球方言のなかでも、文法研究の遅れている宮古方言、八重山方言の動詞、形容詞、名詞の形態論に関する記述研究を行なう必要があった。動詞、形容詞、名詞の形態論に関する研究は、それに続く構文論研究、談話論的な研究の基礎となる重要なものである。

特に研究の遅れている宮古諸島の宮古伊良部島、多良間島、八重山諸島の西表島(祖納)、黒島、石垣島(真栄里と石垣(四箇))、波照間島の7地点の文法記述を行なう必要があった。

2. 研究の目的

琉球方言のなかで文法研究の遅れている八重山方言、宮古方言の動詞、形容詞の形態論に関する研究は、形態素分析を主にした形式面の研究が多かった。

動詞の形態論に関していえば、アスペクト、テンス、ムードなどの形態論的なカテゴリとそれを構成する文法形式の意味の研究は、奄美方言、沖縄方言など北琉球方言に比べて大きく遅れていた。また、動詞のヴォイスに関する研究も大きく遅れていた。

八重山方言、宮古方言も、沖縄方言、奄美方言などと同様に、テンス形式、アスペクト形式、ムード形式、使役動詞、可能動詞を構成する形式が複数あり、標準語や本土諸方言には見られない特徴である。複数の形式が形態論的なカテゴリを構成することは、個々の形式が文法的な意味を分担して担っていることを意味する。個々の形式の文法的な意味の分析を行なうことによって、形態論的なカテゴリのアスペクト、テンス、ムード、構文論的なカテゴリのヴォイスを構成する使役、受動、可能がそれぞれの文法的な意味の体系を解明する。

名詞の形態論に関して、標準語や本土諸方言では既に失われた係助辞と係り結びの現象が存在し、しかも八重山方言の有り様と宮古方言の有り様が大きく異なっていて、それぞれの下位方言の係助辞と係り結びを調査、記述する。そのことを通して、係助辞の

文中での機能を解明する。

本研究は、テンス・アスペクト・ムード、ヴォイス、係り結びを含めた格＝とりたてなどの文法的なカテゴリとそれを構成する形式の表す文法的な意味と機能を総合的に記述することを目的に研究を進めた。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者(狩俣繁久)、研究分担者(金田章宏、仲原穰、仲間恵子)、研究協力者(下地賀代子、狩俣幸子)のそれぞれが臨地調査を行ない、これまでの研究成果をもとに方言文法の特定の形式や文が得られるように作成した調査票を用い、標準語の例文をそれぞれの方言に翻訳してもらって資料を得る方法と、自然談話の録音資料を文字化して資料を得る方法とを併用する。

(2) 動詞の活用形を整理し、活用のタイプを分類する。分類は、原則として、子音語幹を有する強変化動詞型、母音語幹を有する弱変化動詞型、特殊な語幹と語尾を有する不規則変化動詞型に区分する。八重山方言、宮古方言には、強変化動詞型と弱変化動詞型の活用形が並存する混合変化動詞型が存在することが知られているので、上記の四つの型の確認を行って各下位方言の動詞の活用のタイプの分類を行ない、古代日本語、沖縄方言との比較を行う。

(3) テンス・アスペクト、ヴォイスの文法的カテゴリとそれを構成する各形式を取り出し、個々の形式の文法的な意味を解明する。

① テンスに関しては、非過去、過去を表わす形式にどのような形式があるかを確認し、それぞれの形式のテンス的な意味の抽出を中心としながらもアスペクト・テンス・ムード(ATM)的な意味の絡み合いを分析・記述する。

② アスペクトに関しては、完成相、継続相、結果(=パーフェクト)相にどのような形式があるかを確認し、それぞれの形式のアスペクト的な意味の抽出を中心としながらもアスペクト・テンス・ムード(ATM)的な意味の絡み合いを分析・記述する。

③ アスペクトに関しては、沖縄方言などで確認されている直接的エヴィデンシャルティー、間接的エヴィデンシャルティーを明示する形式の有無を確認し、記述する。

④ 上記①②③の記述を総合的に検討し、各下位方言のATM体系を明らかにする。

⑤ ヴォイスに関しては、能動態、受動態、使役動詞、文法的授受動詞、広義のヴォイスと関わる可能動詞、有対自・他動詞、無対自・他動詞の派生のタイプなどを確認し記述する。

⑥ 受動態にはどんなタイプの受動構文があるかを確認し、その表現形式と実現の条件

を記述する。

⑦ 使役動詞に関しては、沖縄方言などで第一使役動詞、第二使役動詞、第三使役動詞と名づけられた複数の形式があり、それぞれの使役動詞が「強制」「指令」「許可」「放任」「二重使役」などの文法的な意味を担い分けられていることが確認されている。八重山方言、宮古方言についても、使役動詞の形式を確認し、形式と、それぞれの使役動詞と「強制」「指令」「許可」「放任」「二重使役」などの文法的な意味との関係を確認し、記述する。

(4) 名詞の格=とりたてのカテゴリーを構成する形式、すなわち、名詞に後接する格助辞、とりたて助辞を抽出し、それぞれの実現する文法的な意味を明らかにする。

4. 研究成果

石垣島石垣(四箇)方言、宮良方言、真栄里、西表祖納方言、伊良部方言、平良方言の名詞の格=とりたての記述研究、動詞の形態論の記述研究、形容詞の形態論の記述研究を行なった。次の(1)~(9)が主要な成果として確認できた。

(1) 宮古島平良方言に du, ga, nu の3個の係助辞が存在すること、伊良部方言には du, ga, ru の3個の係助辞が存在すること、沖縄島首里方言に du, ga の2個の係助辞が存在すること、沖縄島今帰仁方言に du, ga, kuse: の3個の係助辞が存在すること、それぞれの係助辞のあらわれる文のモーダルなタイプが異なっていて、それらの係助辞のあいだに使い分けが存在することを指摘した。それに対して、石垣島の石垣(四箇)方言、宮良方言、真栄里方言の係助辞には du しか存在しないこと、du がさまざまなモーダルなタイプの文にあらわれることを指摘した。

(2) とりたて助辞の中で最も注目され、係り結びの機能を持つと言われてきた du の比較を行ない、石垣(四箇)方言の当該助辞に焦点化の機能は存するが係り結びの機能を持たないことを確認した。また、伊良部方言 du, ga, ru、平良方言 du, ga, ru、首里方言の du, ga、今帰仁方言の du, ga, kuse: も焦点化の機能は存するが係り結びの機能を持たないことを確認した。

(3) 八重山方言の中でも特に研究の遅れていた西表島西部地区方言の文法記述を行い活用のシステムとテンス・アスペクト・ムード体系、ヴォイス、名詞の格=とりたての体系について記述した。

(4) 石垣(四箇)方言、西表祖納方言、真栄里方言、多良間島方言、伊良部方言の動詞の活用形の記述を行った。先行研究で直前過去形と名づけられた完成相過去形の変種が石垣方言にあるが、当該形式がアオリスト的な過去を表わさず、終了限界達成を表わす形式であることを確認した。

(5) 直前過去形に対応する形式が多良間方言にも存在するが、その文法的な意味に終了限界達成性がないこと、宮古諸方言には対応する形式が存在しないことも確認できた。

(6) 石垣(四箇)方言と西表祖納方言のヴォイスに関する記述、特に石垣(四箇)方言と西表祖納方言の自動詞と他動詞の派生関係を記述した。石垣(四箇)方言のばあい、語末に asuN を有する他動詞からは第一使役動詞を作れないことから、自動詞から他動詞を派生させる接尾辞 asuN と第一使役動詞を派生させる接尾辞 asuN が同じ形式に由来するものであると考えられることを指摘した。

(7) 石垣(四箇)方言、西表祖納方言、多良間島方言、伊良部方言の動詞活用タイプの抽出を行った。

① 石垣(四箇)方言、伊良部方言には完全弱変化動詞型の動詞がなく、弱変化動詞型の動詞の一部の活用形に強変化動詞型の活用形を有する混合変化動詞型の動詞のあることが分かった。

② 石垣(四箇)方言の混合変化動詞型の動詞には r 語幹化した強変化動詞型の活用形があることがわかった。

③ 伊良部方言には r 語幹化した活用形を有する動詞は見られないことを確認した。

④ r 語幹化した活用形の有無が石垣(四箇)方言と伊良部方言の混合変化動詞型の大きな差異であることを確認した。

(8) 西表祖納方言、波照間島方言、石垣(四箇)方言、多良間島方言の形容詞を調査して分析した。

① 石垣(四箇)方言、波照間島方言などには、宮古諸方言にみられる形容詞語幹の疊語形が発達していないことを確認した。

② 多良間方言の形容詞が sa 語基に補助動詞 aN を融合させた活用型であることを再確認した。

③ 石垣(四箇)方言などの八重山方言の形容詞の主要なタイプが sa 語基型であるのに対して、伊良部方言などの宮古方言の形容詞の主要なタイプが ku 語基に補助動詞 az を融合させた活用型であることから、形容詞の活用型からは多良間方言が八重山方言に近縁の方言であることを再確認した。

(9) 波照間方言の形容詞語彙とその代表形の語尾の形によるタイプ分けを行なった。また、波照間島方言から 1771 年に集団移住し方言が分岐した白保方言の形容詞でも同様の分析を行なって比較検討した。その結果、次の2点が確認できた。

① haN を語尾にもつ波照間島方言、白保方言が saN を語尾にもつ石垣(四箇)方言との言語接触によって影響を受け、波照間島方言が sahaN という混淆語尾を生成させていることを確認した。

② 白保方言が saN を語尾にもつ石垣(四箇)方

言との言語接触によって saN 語尾形容詞を借用していることを確認した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 15 件)

- (1) 狩俣繁久 (2011) 「消滅危機方言から見た日本語記述文法の未来」『日本語文法』、査読有(10月刊行予定)。
- (2) 下地賀代子(2011)「南琉球・多良間島方言の基本的な ja 構文について」『国立国語研究所論集』1号(10月刊行予定)、査読無。
- (3) 狩俣繁久 (2011) 「音韻研究と方言指導から宮古方言の表記法を考える」パトリック＝ハイブリック、下地理則共編『琉球諸語記録保存の基礎』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp. 194～204、査読無。
- (4) 狩俣繁久 (2011) 「モーダルな文のタイプと焦点化助辞」『日本東洋文化論集』第 17 号、琉球大学法文学部紀要、pp. 1-26、査読無。
- (5) 狩俣繁久・島袋幸子(2011) 「派生関係からみた有対自動詞と有対他動詞－石垣方言ヴォイス研究のためのおぼえがき－」『琉球の方言』35号、法政大学沖繩文化研究所、pp. 17-38、査読有。
- (6) 金田章宏 (2011) 「沖繩西表(祖納)方言動詞の活用タイプ」『琉球の方言』35号、法政大学沖繩文化研究所、pp. 67-81、査読有。
- (7) 狩俣繁久 (2011) 「琉球方言から考える言語多様性と文化多様性の危機」『第3回国際学術フォーラム日本の方言の多様性を守るために』、pp4-11、国立国語研究所、査読無。
- (8) 金田章宏 (2010) 「沖繩西表島祖納方言アスペクト・テンス・ムード体系の素描」須田・新居田編『日本語形態の諸問題』ひつじ書房、pp. 67-81、査読無。
- (9) 狩俣繁久 (2010) 「琉球方言の焦点化の助辞－形態論的なたつづきをかながえる－」『琉球アジア社会文化研究』13号、琉球大学琉球アジア文化研究会、pp. 19-36、査読無。
- (10) 狩俣繁久 (2010) 「南琉球方言の同化と異化」『日本東洋文化論集』第 16 号、琉球大学法文学部紀要、pp. 1-38、査読無。
- (11) 下地賀代子(2010) 「石垣・宮良方言の係助辞-du の文法的意味役割」『日本語文法』10巻2号、日本語文法学会、pp. 143-159、査読有。
- (12) 下地賀代子(2010) (共著) 「多良間島方言の語彙資料(1)－「多良間島方言辞典」作成のための－」『琉球の方言』第 34 号、法政大学沖繩文化研究所、pp. 209-239、査読有。
- (13) 金田章宏 (2009) 「八重山西表方言の形容詞」『国文学解釈と鑑賞』74巻7号、pp. 133-142、査読無。
- (14) 狩俣繁久 (2009) 「波照間方言と与那国

方言の形容詞語尾を言語接触からみる」『南島文化』31号、沖繩国際大学南島文化研究所紀要、pp. 1-10、査読有。

(15) 金田章宏 (2009) 「沖繩西表(祖納)方言の格ととりたての意味用法」『琉球の方言』33号、法政大学沖繩文化研究所、pp. 19-63、査読有。

[学会発表] (計 12 件)

- (1) 狩俣繁久 「琉球列島における言語接触研究」沖繩言語研究センター、沖繩国際大学、2011年2月19日。
- (2) 下地賀代子 「多良間島方言の主題表現」沖繩言語研究センター、琉球大学、2011年1月22日。
- (3) 狩俣繁久 「石垣島四箇方言のテンス・アスペクト・ムード体系」沖繩言語研究センター、2010年12月11日
- (4) 仲間恵子 「八重山石垣市真栄里方言の動詞」沖繩言語研究センター、2010年12月11日
- (5) 狩俣繁久 「消滅危機方言から見た日本語記述文法の未来」日本語文法学会、2010年11月6日、就実大学。
- (6) 狩俣繁久 「琉球方言の継承と活性化に必要な“記述文法”を考える」沖繩言語研究センター、2010年10月16日
- (7) 狩俣繁久 「比較方言学の観点からみた琉球方言の焦点化の助辞の機能」“Workshop on Ryukyuan Languages and Linguistic Research”、琉球大学、2010年8月6日。
- (8) 下地賀代子 「石垣・宮良方言の係助辞-du 文法的意味役割－多良間島方言との比較から－」沖繩言語研究センター、琉球大学、2010年1月22日。
- (9) 狩俣繁久 「宮古伊良部島仲地方言の動詞の終止形」沖繩言語研究センター、琉球大学、2009年11月14日。
- (10) 狩俣繁久 「*Overview of the Ryukyuan languages and Linguistics Research*」“Workshop on Ryukyuan Languages and Linguistic Research”、米国カリフォルニア州サンフランシスコ、UCLA 大学、2009年10月23日
- (11) 下地賀代子 「八重山宮良方言の動詞終止形(中間報告)」沖繩言語研究センター、琉球大学、2009年1月23日。
- (12) 金田章宏 「西表島祖納方言の動詞について」沖繩言語研究センター、琉球大学、2009年1月23日。

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

狩俣繁久 (KARIMATA SHIGEHISA)
琉球大学・法文学部・教授
研究者番号：50224712

(2) 研究分担者

金田章宏 (KANEDA AKIHIRO)
千葉大学・国際教育センター・教授
研究者番号：70214476

仲原穰 (NAKAHARA JOU)
琉球大学・法文学部・非常勤講師
研究者番号：60536689

仲間恵子 (NAKAMA KEIKO)
琉球大学・法文学部・非常勤講師
研究者番号：00412859

(3) 連携研究者

()
研究者番号